

科学的事実論はいつ批判されるのか

工藤怜之 (Satoshi Kudo)

東京大学大学院総合文化研究科

本発表の目的は、科学的事実論争における争点を明確化することにある。一般に、この論争の争点は、科学的事実論と反事実論のバリエーションに依存して、多様に設定されうる。例えば、反事実論として論理実証主義的な立場を想定するならば、争点は、科学理論に登場する、観察不可能な対象を指示するよう見える語の意味はどのように理解すればよいか、などといった点になる。しかし、論理実証主義が既に力を失った現在では、言語に関する問題は、科学的事実論争の大きな論点としては扱われていない。1980年ごろからは、代表的な反事実論者として Bas van Fraassen や Larry Laudan などが挙げられることが多いが、認識論的な問題がこの論争の主要な争点である、というのが共有された理解となっていると思われる。本発表では、科学的事実論と反事実論が、認識論に関して、何を争っているのか、争っていないのかを明確にすることを目指す。特に、事実論がどのような認識論的前提に立って主張される(べき)かに注目し、その前提と噛み合うような形で事実論批判を理解したい。

まず、事実論者と反事実論者が明確に同意している点を確認する。代表的な事実論者 (Richard Boyd や Stathis Psillos) と反事実論者 (van Fraassen や Laudan) は、いずれも基礎づけ主義的な認識論を放棄する点では対立していない。事実論者は、十分な成功を収めている科学理論は近似的に真であると信じてよいなどと主張するが、その根拠として不可謬な基礎的信念などを想定したいわけではない。また、科学理論を構築・選択するための方法論が信頼できることを主張するが、その信頼性がアприオリに正当化できると主張しているわけでもない。Boyd や Psillos と Laudan は、さらに、「自然主義」を標榜する点でも共通している。すなわち、よい認識に至るための信頼できる方法がどのようなものかは、経験的に探究するしかないが、経験的に探究できる、と考えている点で争いが無い。

Boyd は、このように自然主義的認識論を前提することの含意として、科学の探究方法の根本的な偶然性という面を強調する。事実論者は、科学の経験的探究の方法は信頼できると主張し、だからこそ、その方法によって獲得された理論の(近似的)真理性を信じてよいと主張するのだが、そもそも信頼できる方法に科学が行き当たったこと自体は全くの偶然でしかない。どのような方法が信頼できるかは、この世界のあり方によって決まる偶然的な事柄であって、予めアприオリに認識できるものではないからである。成功している理論伝統は、ある時点で幸運にも近似的真理を捉えられたために、その伝統の理論負荷的な方法を通じて進歩することができた、というのが Boyd の描く事実論的科学像である。

どのような方法に従って経験的信念を形成すべきかはアприオリに基礎づけられない、という主張は穏当であるように見える。少なくとも、科学的事実論争の論者たち

はこの点を争わない。しかし、この主張によって実在論者は、自分たちの信念の正当性を問われても、それを究極的には基礎づけられないと認めていることになる。別の言い方をすれば、実在論者は、典型的には奇跡論法によって実在論の立場を正当化しようとするが、奇跡論法（あるいは、最良の説明への推論）が信頼できることは究極的には基礎づけを欠くと認めているのである。ということは、実在論者に対して、「理論が経験的に成功しているからと言って、なぜそれが近似的に真であると信じられるのか」と問うても、彼らはその正当化をどこかで諦めてしまうということである。もちろん、一般的には、「信念の究極的な基礎づけなどできない以上、正当化のプロセスはどうせどこかの時点で諦めざるを得ない」と認めたからといって、「論争の場で信念の正当化を求めることは無意味だ」と認めることにはならない。論争の参加者の間で一定の認識論的前提が共有されていれば、その文脈における正当化の可否を議論することができるからである。しかし、科学的実在論争においては、経験的に成功している理論が本当に近似的に真であるかどうか、答え合わせをすることができない。したがって、論者間で共有される前提に基づいて、これまで奇跡論法の成功率は十分に高かったから奇跡論法は信頼できると推論できる、などと論じることはできない。実在論者は、せいぜい、科学は偶然にも近似的真理に行き当たり進歩してきた、という実在論的科学像は経験に合っており、だからそれを信じるのだ、ということしかできないと思われる。

実在論者は、奇跡論法の信頼性を論じることなく（それは不可能なのだから）、しかし、それに従って実在論的信念を持っている。このように実在論を解釈することは、その立場をひどく貧弱で魅力のないものに貶めているように見えるかもしれない。しかし、最も強力な反実在論者と目される van Fraassen との論争の文脈で考えると、必ずしもそうではない。van Fraassen は、自然主義的認識論を名指しで批判するが、その議論は自然主義が循環を免れないという批判であるように見える。しかし、上述の仕方理解される実在論は、その批判を回避している。van Fraassen は、伝統的な認識論に見られる基礎づけの夢を批判し、信頼できる推論規則などないとする「新しい認識論」を展開しているが、この認識論的枠組みにおいては、彼自身も明言しているように、経験的に成功しているという理由で科学理論の真理性を信じることも合理的と認められる。経験的に成功しているから理論の真理性を信じるという推論の妥当性を究極的に基礎づけられるかを問う文脈においては、実在論者と van Fraassen は争わずともよい。van Fraassen の新しい認識論の枠組みを受け容れても、実在論的科学像を（かなりの程度）維持する余地はあると思われる。

他方、実在論者と Laudan との認識論的争点（のひとつ）は悲観的帰納法をめぐるものである。悲観的帰納法は、上で述べた実在論解釈に対しても、脅威となる可能性がある。科学は近似的真理に行き当たり、連続的に進歩してきたという実在論の前提を否定するものだからである。しかし、上で述べた実在論解釈に従えば、実在論者が悲観的帰納法に応答する際には、実在論的科学像が維持できることを示せば十分であり、実在論的信念を持つことの信頼性までは示そうとしていない、と理解すべきである。